

冬

芥川龍之介

青空文庫

僕は重い外套がいとうにアストラカンの帽をかぶり、市ヶ谷いちがやの刑務所へ歩いて行つた。僕の従兄とこは四五日前にその刑務所にはいつていた。僕は従兄を慰める親戚総代にほかならなかつた。が、僕の気もちの中には刑務所に対する好奇心もまじっていることは確かだつた。

二月に近い往来は売出しの旗などの残つていたものの、どこの町全体も冬枯れていた。

僕は坂を登りながら、僕自身も肉体的にしみじみ疲れていることを感じた。僕の叔父おじは去年の十一月に喉頭癌こうとうがんのために故人になつていた。それから僕この遠縁の少年はこの正月に家出していた。それから——しかし従兄の収監しゅうかんは僕には何よりも打撃だつた。僕は従兄の弟と一しよに最も僕には縁の遠い交渉を重ねなければならなかつた。のみならずそれ等の事件にからまる親戚同志の感情上の問題は東京に生まれた人々以外に通じ悪いこにくだわりを生じ勝ちだつた。僕は従兄と面会した上、ともかくどこかに一週間でも静養したいと思わずにはいられなかつた。……

市ヶ谷の刑務所は草の枯れた、高い土手どてをめぐらしていた。のみならずどこか中世紀じみた門には太い木の格子戸こうしどの向うに、霜に焦げた檜ひのきなどのある、砂利じやりを敷いた庭を透すかしていた。僕はこの門の前に立ち、長い半白はんぱくの髭ひげを垂たらした、好人物らしい看守かんしゅに名刺

を渡した。それから余り門と離れていない、ひさし庇に厚いこけ苔の乾いた面会人控室へつれて行って貰った。そこにはもう僕のほかにもうすべ薄縁りを張った腰かけの上に何人も腰をおろしていた。しかし一番目立ったのは黒縮緬くろちりめんの羽織をひっかけ、何か雑誌を読んでいる三十四五の女だった。

妙に無愛想ふあいそうな一人の看守は時々こう云う控室へ来、少しも抑揚よくようのない声にちょうど面会の順に当たった人々の番号を呼び上げて行つた。が、僕はいつまで待っても、容易に番号を呼ばれなかった。いつまで待っても——僕の刑務所の門をくぐったのはかれこれ十時になりかかつていた。けれども僕の腕時計はもう一時十分前だった。

僕は勿論もちろん腹も減りはじめた。しかしそれよりもやり切れなかったのは全然火の氣けと云うもののない控室の中の寒さだった。僕は絶えず足踏みをしながら、苛々いらいらする心もちを抑おさえていた。が、大勢おおぜいの面会人は誰も存外ぞんがい平気らしかった。殊に丹前たんぜんを二枚重ねた、博奕ばくち打ちらしい男などは新聞一つ読もうともせず、ゆっくり蜜柑みかんばかり食いつづけていた。しかし大勢の面会人も看守の呼び出しに来る度にだんだん数を減らして行つた。僕はとうとう控室の前へ出、砂利を敷いた庭を歩きはじめた。そこには冬らしい日の光も当たっているのに違いなかった。けれどもいつか立ち出した風も僕の顔へ薄い塵ちりを吹きつけて来る

のに違いなかった。僕は自然と依怙地になり、とにかく四時になるまでは控室へはいるまいと決心した。

僕は生憎四時になつても、まだ呼び出して貰われなかった。のみならず僕より後に来た人々もいつか呼び出しに遇つたと見え、大抵はもういなくなっていた。僕はとうとう控室へはいり、博奕打ちらしい男にお時宜をした上、僕の場合を相談した。が、彼はにこりとみせず、浪花節語りに近い声にこう云う返事をしただけだった。

「一日に一人しか会わせませんからね。お前さんの前に誰か会っているんでしよう。」

勿論こう云う彼の言葉は僕を不安にしたのに違いなかった。僕はまた番号を呼びに来た看守に一体従兄に面会することは出来るかどうか尋ねることにした。しかし看守は僕の言葉に全然返事をしなかった上、僕の顔も見ずに歩いて行ってしまった。同時にまた博奕打ちらしい男も二三人の面会人と一しよに看守のあとについて行ってしまった。僕は土間のまん中に立ち、機械的に巻煙草に火をつけたりした。が、時間の移るにつれ、だんだん無愛想な看守に対する憎しみの深まるのを感じ出した。（僕はこの侮辱を受けた時に急に不快にならないことをいつも不思議に思っている。）

看守のもう一度呼び出しに來たのはかれこれ五時になりかかっていた。僕はまたアスト

ラカンの帽をとった上、看守に同じことを問いかけようとした。すると看守は横を向いたまま、僕の言葉を聞かないうちにさつさと向うへ行つてしまった。「余りと言えば余り」とは実際こう云う瞬間の僕の感情に違いなかった。僕は巻煙草の吸いさしを投げつけ、控室の向うにある刑務所の玄関^{げんかん}へ歩いて行つた。

玄関の石段を登つた左には和服を着た人も何人か硝子窓^{ガラス}の向うに事務を執^とつていた。僕はその硝子窓をあけ、黒い紬^{つむぎ}の紋つきを着た男に出来るだけ静かに話しかけた。が、顔^{かお}色^{いろ}の変っていることは僕自身はつきり意識していた。

「僕はTの面会人です。Tには面会は出来ないんですか？」

「番号を呼びに来るのを待つて下さい。」

「僕は十時頃から待つています。」

「そのうちに呼びに来るでしょう。」

「呼びに来なければ待つているんですか？ 日が暮れても待つているんですか？」

「まあ、とにかく待つて下さい。とにかく待つた上にして下さい。」

相手は僕のあばれでもするのを心配しているらしかった。僕は腹の立つている中^{うち}にもちよつとこの男に同情した。「こつちは親戚総代になっていれば、向うは刑務所総代になつ

ている、」——そんな可笑^{おか}しさも感じないのではなかった。

「もう五時過ぎになつています。面会だけは出来るように取り計^はつて下さい。」

僕はこう言い捨てたなり、ひとまず控室へ帰ることにした。もう暮れかかった控室の中にはあの丸鬚^{まるまげ}の女が一人、今度は雑誌を膝の上に伏せ、ちゃんと顔を起していた。まともに見た彼女の顔はどこかゴシックの彫刻らしかった。僕はこの女の前に坐り、未だ^{いま}に刑務所全体に対する弱者の反感を感じていた。

僕のやつと呼び出されたのはかれこれ六時になりかかっていた。僕は今度は目のくりくりした、機敏らしい看守^{かんしゅ}に案内され、やつと面会室の中にはいることになった。面会室は室と云うものの、精々^{せいせい}二三尺四方ぐらいだった。のみならず僕のはいったほかにもペンキ塗りの戸の幾つも並んでいるのは共同便所にそっくりだった。面会室の正面にこれも狭い廊下^{ろうか}越しに半月形^{はんげつがた}の窓が一つあり、面会人はこの窓の向うに顔を覗^あわす仕組みになつていた。

従兄^{いとこ}はこの窓の向うに、——光の乏しい硝子窓^{ガラス}の向うに円まると肥^{ふと}った顔を出した。しかし存外^{ぞんがい}変つていないことは幾分か僕を力丈夫にした。僕等は感傷主義^{まじ}を交えずに手短かに用事を話し合つた。が、僕の右隣りには兄に会いに来たらしい十六七の女が一人とめ

どなしに泣き声を洩らしていた。僕は従兄と話しながら、この右隣りの泣き声に気をとめない訣には行かなかった。

「今度のことは全然冤罪ですから、どうか皆さんにそう言つて下さい。」

従兄は切り口上にこう言つたりした。僕は従兄を見つめたまま、この言葉には何とも答えなかった。しかし何とも答えなかったことはそれ自身僕に息苦しさを与えない訣には行かなかった。現に僕の左隣りには斑に頭の禿げた老人が一人やはり半月形の窓越しに息子らしい男にこう言つていた。

「会わずにひとりでいる時にはいろいろのことを思い出すのだが、どうも会うとなると忘れてしまつてな。」

僕は面会室の外へ出た時、何か従兄にすまなかつたように感じた。が、それは僕等同志の連帯責任であるようにも感じた。僕はまた看守に案内され、寒さの身にしみる刑務所の廊下を大股に玄関へ歩いて行つた。

ある山の手の従兄の家には僕の血を分けた従姉が一人僕を待ち暮らしているはずだった。僕はごみごみした町の中をやつと四谷見附の停留所へ出、満員の電車に乗ることにした。「会わずにひとりいる時には」と言つた、妙に力のない老人の言葉は未だに僕の耳に残つ

ていた。それは女の泣き声よりも一層僕には人間的だった。僕は吊り革につかまっただまま、夕明りの中に電燈をともした麴町こうじまちの家々を眺め、今更のように「人さまざま」と云う言葉を思い出さずにはいられなかった。

十分ばかりたつた後のち、僕は従兄の家の前に立ち、コンクリイトの壁についたベルの鈕ボタンへ指をやっていた。かすかに伝わつて来るベルの音は玄関の硝子戸ガラスの中に電燈をともした。それから年をとつた女中が一人細目に硝子戸をあけて見た後のち、「おや……」何とか間投かんとう詞しを洩らし、すぐに僕を往来に向つた二階の部屋へ案内した。僕はそのテエブルの上へ外套がいとうや帽子を投げ出した時、一時に今まで忘れていた疲れを感じずにはいられなかった。女中は瓦斯暖炉ガスだんろに火をともし、僕一人を部屋の中に残して行つた。多少の蒐集癖を持つていた従兄はこの部屋の壁にも二三枚の油画あぶらえや水彩画すいさいがをにかけていた。僕はぼんやりそれらの画えを見比べ、今更のように有為転変ういてんぺんなどと云う昔の言葉を思い出していた。そこへ前後してはいつて来たのは従姉や従兄の弟だった。従姉も僕の予期したよりもずつと落ち着いているらしかった。僕は出来るだけ正確に彼等に従兄の伝言を話し、今度の処置を相談し出した。従姉は格別積極的はどうしよう云う気も持ち合せなかった。のみならず話の相間あいまにもアストラカンの帽をとり上げ、こんなことを僕に話しかけたりした。

「妙な帽子ね。日本で出来るもんじやないでしょう？」

「これ？ これはロシア人のかぶる帽子さ。」

しかし従兄の弟は従兄以上に「仕事師」だけにいろいろの障害を見越していた。

「何しろこの間も兄貴の友だちなどは××新聞の社会部の記者に名刺を持たせてよこすんです。その名刺には口止め料金のうち半金^{はんきん}は自腹を切って置いたから、残金を渡してくれと書いてあるんです。それもこつちで検^{しら}べて見れば、その新聞記者に話したのは兄貴の友だち自身なんですからね。勿論半金などを渡したんじゃない。ただ残金をとらせによこしているんです。そのまた新聞記者も新聞記者ですし、……」

「僕もとにかく新聞記者ですよ。耳の痛いことは御免蒙^{ごめんこうむ}りますかね。」

僕は僕自身を引き立てるためにも常談^{じょうだん}を言わずにはいられなかった。が、従兄の弟は酒気を帯びた目を血走らせたまま、演説でもしているように話しつづけた。それは実際常談さえうっかり言われない権幕^{けんまく}に違いなかった。

「おまけに予審判事^{よしんはんじ}を怒^{おこ}らせるためにわざと判事をつかまえては兄貴を弁護する手合いもあるんですからね。」

「それはあなたからでも話して頂けば、……」

「いや、勿論そう言っているんです。御厚意は重々感謝しますけれども、判事の感情を害すると、反つて御厚意に背きますからと頭を下げて頼んでいるんです。」

従姉は瓦斯暖炉の前に坐つたまま、アストラカンの帽をおもちゃにしていた。僕は正直に白状すれば、従兄の弟と話しながら、この帽のことばかり気にしていた。火の中にでも落されてはたまらない。——そんなことも時々考えていた。この帽は僕の友だちのベルリンのユダヤ人町を探がした上、偶然モスクヴァへ足を伸ばした時、やつと手に入れることの出来たものだつた。

「そう言つても駄目ですかね？」

「駄目どころじゃありません。僕は君たちのためにを思つて骨を折つていてやるのに失敬なことを言うなと来るんですから。」

「なるほどそれじゃどうすることも出来ない。」

「どうすることも出来ません。法律上の問題には勿論、道徳上の問題にもならないんですからね。とにかく外見は友人のために時間や手数をつぶしている、しかし事實は友人のために陥し穽を掘る手伝いをしている、——あたしもずいぶん奮闘主義ですが、ああ云うやつにかかつては手も足も出すことは出来ません。」

こう云う僕等の話の中に俄かに僕等を驚かしたのは「T君万歳」と云う声だった。僕は片手に窓かけを挙げ、窓越しに往来へ目を落した。狭い往来には人々が大勢道幅一ぱいに集っていた。のみならず××町青年団と書いた提灯が幾つも動いていた。僕は従姉たちと顔を見合せ、ふと従兄には××青年団団長と云う肩書もあつたのを思い出した。

「お礼を言いに出なくっちゃいけないでしょうね。」

従姉はやつと「たまらない」と云う顔をし、僕等二人を見比べるようにした。

「何、わたしが行つて来ます。」

従兄の弟は無造作にさつさと部屋を後ろにして行つた。僕は彼の奮闘主義にある羨しさを感じながら、従姉の顔を見ないように壁の上の画などを眺めたりした。しかし何も言わずにすることはそれ自身僕には苦しかった。と云つて何か言つたために二人とも感傷的になつてしまうことはなおさら僕には苦しかった。僕は黙つて巻煙草に火をつけ、壁にかかげた画の一枚に、——従兄自身の肖像画に遠近法の狂いなどを見つけていた。

「こつちは万歳どころじゃありません。そんなことを言つたつて仕かたはないけれども……」

従姉は妙に空ぞらしい声にととう僕に話しかけた。

「町内^{ちやうない}ではまだ知らずにいるのかしら？」

「ええ、……でも一体どうしたんでしょう？」

「何が？」

「Tのことよ。お父さんのこと。」

「それはTさんの身になって見れば、いろいろな事情もあつたろうしさ。」

「そうでしょうか？」

僕はいつか苛^あ立たしさを感じ、従姉に後ろを向けたまま、窓の前へ歩いて行つた。窓の下の人々は不相^{あいかわらず}変万歳の声を挙げていた。それはまた「万歳、万歳」と三度繰り返して唱^{とな}えるものだつた。従兄の弟は玄関の前へ出、手ん手に提^{ちやうちん}灯をさし上げた大勢^{おおぜい}の人々にお時宜^{じぎ}をしていた。のみならず彼の左右には小さい従兄の娘たちも二人、彼に手をひかれたまま、時々取つてつけたようにちよつとお下^さげの頭を下げたりしていた。……

それからもう何年かたつた、ある寒さの厳しい夜、僕は従兄の家の茶の間^まに近頃始めた薄荷^{はつか}パイプを啣^{くわ}え、従姉と差し向いに話していた。初^{しよ}七日^{ななのか}を越した家の中は気味の悪いほどの静かだつた。従兄の白木^{しらき}の位牌^{いはい}の前には燈^{とう}心^{しん}が一本火を澄ましていた。そのま位牌を据えた机の前には娘たちが二人夜着^{よぎ}をかぶっていた。僕はめつきり年をとつた従

姉の顔を眺めながら、ふとあの僕を苦しめた一日の出来事を思い出した。しかし僕の口に出したのはこう云う当り前の言葉だけだった。

「薄荷パイプを吸っていると、余計寒さも身にしみるようだね。」

「そうお、あたしも手足が冷えてね。」

従姉は余り気のないように長火鉢の炭などを直していた。……

(昭和二年六月四日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

冬

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>